

# 令和三年度 公益財団法人納税協会連合会会長賞

## “税金”を想う

西大和学園高等学校 一年 原田 知香

「えっ！そんなに高いの?!」

静かな病院の受付で、思わずそんな心の声が漏れそうになった。

これはつい最近、高校生になって初めて病院へ行き、お会計の時のこと。普段から自分で支払っていたわけではないが、その日は私が受付へ。いつも通りお会計を待っていたが、少し前病院へ行った時より何倍もの金額が表示されていてびっくり。マスク越しでも、受付の方に伝わっていたかと思うと、恥ずかしい。おかしいな、と思って、母に聞いてみると、「高校一年生からは受給者証がなくなるから、医療費の二～三割自己負担なの。」と。それでも、二～三割の負担なのだから全額負担となると、五人家族である私の家族は医療費だけでだいぶかかってしまう。税金のありがたみを肌で感じた瞬間だった。

思えば、「税金」というものがまだよく理解していない小さい時から今まで様々な場面で税金の恩恵を受けてきた。小学校や中学校に通えること、教科書一つ手に取っても全て税金で賄われている。公園や街路樹、道沿いの花壇が、きれいに清潔に保たれているのも「税金」というものがあるからである。少し前、消費税が10%に引き上げられた時、税金についてほとんど何も知らないまま、「いやだなあ」と思ってしまった自分が恥ずかしくなった。

しかし、ふと思った。全国の子どもたちが同じように十分にサービスを受けられているのだろうか、と。その時、私の頭をよぎったのは「ヤングケアラー」という文字だ。最近、新聞やニュースで耳にするようになった。両親が病気で動けず、介護が必要、障がいをもつ家族の世話をしなければならぬ、など個々様々な事情で、通学のかたわら家事や家族の世話をする十八歳未満の子どもが、全体の約二割いるということが明らかになり、社会問題となっている。なぜ、そのような子どもたちの存在が頭をよぎったかということ、私と同年、もしくは私より小さな子どもがもしかすると私たちと同じように十分なサービスが受けられていないかもしれないと思ったからだ。誰もその境遇になりたくてなったわけではないし、その子たちに責任はない。もちろん、その家族にも。

私は税金についてほんの少ししか知らないし、自分が納めているのも消費税だけ。納められた税金がどこでどのくらいどんな風に使われているのか、詳しくは分からない。でも税金の使い道が検討されているなら、そういった子どもたちの声に耳を傾けてほしい。私も身近にいたことがないが、誰か大きな機関が動かないと抜けだせないのではないと思う。入院費を賄う、ヘルパ

ーさんを派遣する、援助金を配布する…。形は色々だと思う。この願いが誰かの心に届くことをそっと祈る。